

小学校から学ぶ「エシカル消費」

「あなたは、買い物をするとき、人や社会、地域、環境に配慮した製品やサービスを選んでますか。」

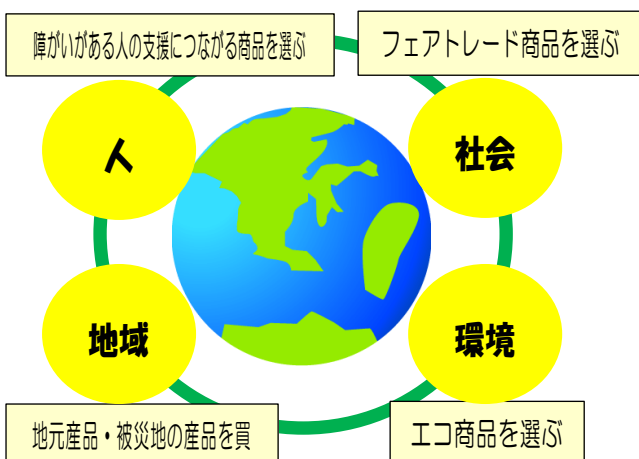
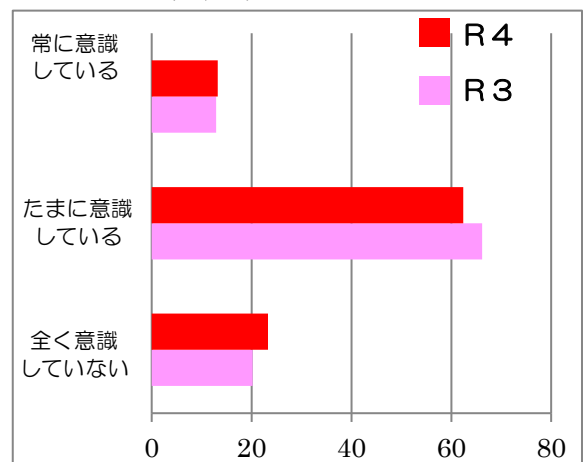
上記の質問は「エシカル消費」のことであり、その理念はSDGs目標12「つくる責任つかう責任」とも深く関連しています。とつながらとも深く関連しています。

本年度「市民生活アンケート」での上記の質問への回答結果によると、「常に意識している」「たまに意識している」を合わせた『意識している』は全体の79.1%でした。一方、「全く意識していない」は18歳～29歳の32.5%が最も高いという結果でした。

私たちは消費行動を通して、社会とつながっています。だからこそ小学校段階から「エシカル消費」を学び、実践していくことが大切になるのです。

本年度、浜松市くらしのセンターでは、小学校6年生を対象として出前講座「SDGsとエシカル消費」を実施してきました。講座では、児童労働や食品ロスの実情を伝えながら自分でできる「エシカル消費」について考えることを通して、実践を促しています。

R4 浜松市民生活アンケート



以下は、子どもたちの感想です。

- ・エシカル消費やフェアトレードについて初めて知った。自分の生活が世界の重大な問題とつながっていることを改めて感じた。
- ・一人一人がほんの少しエシカル消費を意識するだけで、世の中が良い方に動いていくので、自分のできることから取り組んでいきたい。
- ・「消費」が「買って、使って、捨てる」ところまでだと知った。これからは、使った物の処理まで責任をもつようにしたい。

小学校段階から消費者教育を行うことの重要性は、みなさんご承知のことと思います。今後は、家庭科における単発的な学習にとどめず、各教科と連携を図りながら取り組む消費者教育の展開も必要になってきます。浜松市くらしのセンターでは、学校と連携を図り、適切な教材の開発や情報発信、効果的な出前講座の企画等を推進していきます。今後ともよろしくお願いいたします。

浜松市くらしのセンター 消費者教育コーディネーター 山田真代子

第3回家庭科研修会報告 <富塚小>

1 授業の様子

富塚小学校6年生、幸田先生による「こんだてを工夫して」～勤労感謝の日に、家族に感謝の気持ちを伝える献立チケットをプレゼントしよう～の授業では、本題材の第3時の授業が行われました。児童の意欲を高めるために、「感謝の気持ちを伝える献立チケット」をプレゼントするという目的をもたせ、前時までの活動で家族のための1食分の献立を考えました。本時では、献立づくりで大切なポイントに気付かせるため、平安、江戸、昭和時代のそれぞれの食事の写真を見て気付いたことをグループで話し合い、ジャムボード上で付箋に記入して行きました。また、タブレット端末を利用し、中華料理のメニューの中から、主食・主菜・副菜・汁物のより良い組み合わせをグループで考えました。改めて献立作りのポイントを確認した後、前回自分で作った献立を見直して、改善しようと考えたことをジャムボード上で付箋にメモをして行きました。子供たちは、それぞれの時代や国が違って、献立づくりで大事にするべきことの共通点があることに気づき、自分の献立をさらに良くしていこうという意識を高めることができました。



2 グループ協議

①「自分の生活の中から課題をもち、様々な解決方法を考え、その課題に夢中になって追究し、生活をよりよくしようと工夫する子供の育成を目指した授業」の視点より

○「家族に感謝の気持ちを伝える献立チケット」という課題を設定することで実生活に結びつけて、家族によりよいものを作りたいという思いにつながっていた。

○家庭科だけでなく、歴史や外国の文化など、子供たちの興味をもっていることを教科横断的に学習できた。

○時代ごとの食事の写真や中華料理のメニューなど、視覚的に分かりやすいものを用意することで、子供たちの関心が高まった。

○修正がきき、積み重ねもしやすいため、ICTの活用の仕方が課題追究に向いていた。

△家族の誰に作るのか、相手意識をよりはっきりさせるとよりよかった。

②「小中5年間のつながりを意識し、見方・考え方を働かせる深い学びにつながる学習過程、問題解決的な学習など、新しい内容を踏まえた工夫された授業」の視点より

○ICTを活用することで意見が言いづらい子も意思表示ができ、付箋で友達の意見を見比べられた。

○自分で課題を見つけて献立を改善していくことで、今後の生活にも生かしていくことができる。

△タブレットを使った学習は個人作業になりがちだった。中華料理はカードを作って手で動かすなど、「みんなで」と「個別で」の併用をすることで深い学びにつながる。

△よりよい献立づくりの視点を増やすため、栄養教諭等のゲストティーチャーに話してもらうとよい。



3 市教委指導主事 前田浩平先生の講話より

今回の授業は、家庭科の見方・考え方に示される視点のうち、2つに関わる題材構成になっている。栄養バランスを考えた献立を考えた点では「健康・安全・快適」、歴史や地域の食事を扱った点では「生活文化の継承・創造」の視点で捉えられる。

題材の配列や系統性をもたせることも重要である。5年生では各単元の第1時は「知識及び

技能」から、6年生では「思考力，判断力，表現力等」からスタートしている。これは、6年生では第1時に自分の生活から課題を見出し、その解決に向けて学びを深めていく構成になっているためである。食生活の内容は、「食事の役割」「調理の基礎」「栄養を考えた食事」の3項目で構成されている。今回は「栄養を考えた食事」に重点が置かれるが、おいしく楽しく食べる工夫や、家族との触れ合いなど「食事の役割」の内容を6年生の最後に盛り込むとよい。

これまでの学びは、教師が知識を教える構図や、教師と子供、子供と子供のやり取りの構図であった。しかしこれからは、知識データベース（情報）を中心として、各自が主体的に学びを進める構図が個別最適な学びには不可欠である。

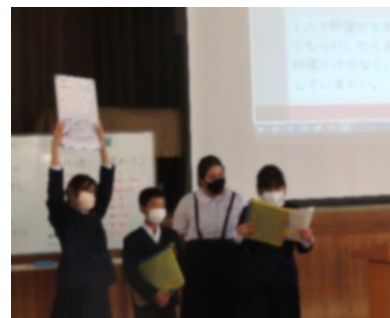
（文責：原田佳代子）



第3回家庭科研修会報告 <北浜北小>

1 授業の様子

北浜北小学校6年生、保科先生による「共に生きる地域での生活」～地域・家族とつながるプロジェクト～の授業では、本題材の最終時の授業が行われました。子供たちは、前時までの活動で、自分のプロジェクト計画を家庭や地域で実践し、成果や感想をスライドにまとめました。本時では、「地域の人や家族と自分がかつて強くなるために、自分にできることを見つけよう。」のめあてに向かって、一人一人がグループで実践を発表し、互いの実践の良い所を見付けました。そして、選ばれた班の代表者は全体の場で発表を行いました。また、「家庭科の技」と「関わり方」という視点から、班員も代表者の実践の「おすすめポイント」を紹介しました。子供たちは、グループ交流や全体発表を通して、友達の実践の良いところを見付け、さらに自分の生活を振り返りながら、今後の生活に生かしたいことを考えることができました。



2 グループ協議

①「自分の生活の中から課題をもち、様々な解決方法を考え、その課題に夢中になって追究し、生活をよりよくしようと工夫する子供の育成を目指した授業」の視点より

○子供たちが課題設定の段階で、自分の生活の課題から目指すゴールまで設定したことが良い。

○子供たちがゴールイメージをもって主体的に活動に取り組むことができ、さらに、ゴール設定外での気づきや思いが生まれていた。

○地域・家族とつながるという目標に対して、自分ができることをよく考えて取り組んでいた。家庭と授業がつながっていた。

○子供同士の質問からも、お互いに興味をもち、課題解決に向けて取り組んでいた。

②「小中5年間のつながりを意識し、見方・考え方を働かせる深い学びにつながる学習過程、問題解決的な学習など、新しい内容を踏まえた工夫された授業」の視点より

○子供たちのスライド作成で、教師が型を示したことが良い。

○どの子も、地域や家族に対する自分の思いや実践前と実践後の変化等を写真やイラストを用いて工夫してまとめ、分かりやすく発表ができたことが、活発な交流につながっていた。

○教師がキャリア教育の視点「つなげる」(キャリアプランニング能力)を提示したことで、発表して終わりではなく、これからの



生活に生かそうとする意見が子供たちから多く出た。

○今回の活動で、子供たちが自分のプロジェクトをやり遂げ、達成感を得られたことは、今後の意欲へとつながっていく。

3 静岡大学准教授 小清水貴子先生の講話より

小清水貴子先生の講話では、自己肯定感が下がりがちで様々な困難を抱えやすい 10 歳～15 歳の時期において、地域・家族とつながることの大切さについてお話がありました。SNS の発展に伴い、現代社会ではインターネット空間も、居場所の一つになっています。しかし、インターネット空間は、物理的な居場所になっても、精神的な居場所にはならず、実際、困難を改善できた経験のきっかけは、学校、家庭、地域にあるということでした。困ったときに助けてくれる存在として地域の人との関わることはとても大切であり、地域とかかわることは、生涯にわたって、他者と共生してよりよい生活を送る力を身に付けるために非常に重要であると感じました。子供・若者の 8～9 割が社会貢献への意欲をもっていることから、青年期の子供たちが地域で活動することを通して、自己肯定感の向上につなげないかというお話がありました。自己肯定感の向上という点からも、改めて、家庭科の学習「家庭や地域の人々との関わり」の重要性を考えさせられました。

(文責：森田絵奈)



第 8 回 東海・北陸地区小学校家庭科教育研究大会 名古屋大会 報告

令和 4 年 1 0 月 1 9 日 愛知県名古屋市立千代田橋小学校

大会研究主題

豊かな心と実践力を育み、未来を拓く家庭科教育
人と関わりながら、生活をよりよくすることができる児童の育成

公開授業参観・研究協議より

★公開授業参観

5 年 生活を変えるチャンス！「我が家の団らんプロジェクト」

6 年 生活を変えるチャンス！「地域とつながるプロジェクト」

他学年「人との関わりカリキュラム」授業

研究授業では、どの学年もタブレットを活用し、自分の考えを継続して記録したり、それらを用いてグループで交流をしたりする活動を取り入れていました。6 年生では、家庭科の題材として扱うだけでなく、総合的な学習の時間に地域の方の思いをインタビューする活動をしたことで、題材をより自分ごととして捉えることができていました。人との関わりを大切にした成果であると思いました。5 年生では、団らんについて考える際に、自分の家庭ではなく架空のモデル家庭を扱い、児童同士が交流していました。家庭には個人差があるため、そうすることで、より「団らん」について知識を深めやすく、自分の家庭についての課題発見につながるようでした。今後の家庭科授業では、題材の構成を工夫したり、タブレットを活用し個の学びの充実を図ったりしていきたいと感じました。



★研究協議・指導講評より 講師 愛知教育大学・中部大学 非常勤講師 上田 資子 氏
・ 総合的な学習の時間において、地域の人々の思いに触れたことで、家庭科の学習の中でも、自分たちができることを考えることができた。

- ・ コロナ禍で、人との関わりが希薄になりがちであるからこそ、家庭科において家庭生活や地域との関わりをじっくりと学習することが大切である。

講演「豊かな心と実践力を育み、未来を拓く家庭科教育」

文部科学省 教科調査官 熊谷 有紀子 氏

家庭科の授業でこれからも大切にしていきたいこと

○「分かった」「できた」だけでなく、「なぜ、そのようにするのか」を大切にした授業

- ・・・根拠とともに理解し、技能として身に付けられるようにする。
→様々な場面で活用できる知識と、変化や課題に対応し活用できる技能

○「思考力、判断力、表現力等」を育成し、課題解決の力を養う授業

- ・・・習得した「知識及び技能」を活用し、一連の学習過程を通して課題を解決した達成感や実践する喜びを味わい、次の学習に主体的に取り組めるようにする。
学習過程の中に、家庭での実践を計画し、事後に評価、改善する。

○「見方・考え方」を働かせられるようにする授業

- ・・・「見方・考え方」は、視点ではない。働かせるのは子供。
授業を構想するときには、子供が「見方・考え方」を働かせている姿を思い描く。
実際に授業を行うときには、発問、問い返し、声掛け、板書や記述から、子供の姿を捉え、位置付けたり広げたりすることで、「見方・考え方」を働かせられるようにしていく。

(文責：河村鮎美)

【編集後記】

今年度は名古屋市内の学校で公開授業を参観することができました。都市部の子供たちが将来、家庭や地域と関わりながら、よりよく生活していくためにも、家庭科の学習が大切であると感じました。

部長 河村鮎美